論説

両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり（下）
―『復国時期 1941–1946 におけるカオダイ教の歴史』を中心として―

髙　津　　　茂

5. 仏印処理に向けたカオダイと日本の協力

(1) 最初にサイゴンで爆弾が炸裂し，カオダイは日本を支援した

戦局の劣勢の中，1944 年初め[1]より米・英によるサイゴン爆撃が激化したため，市民の混乱とメコンデルタを中心とした南部六省への疎開が始まり，物価が上がり，多くの工場や事務所が閉鎖に追いやられ，労働力の確保は難しくなった。そこで，日本の参謀部は造船所の労働力確保の目的でカオダイに接近を図った[2]。チャン・クゥアン・ヴィンはこの要請に応えざるをえなかったので，カオダイの青年たちに極秘で召集命令を出し，カオダイの青年たちはこの指令に応えて志願してサイゴンに戻った。市民の多くが我先にサイゴンから疎開する中を，逆行してカオダイの青年信徒が大挙して上京してくる様は，市民たちの目には些か奇異に映ったようである。カオダイ教徒が皆衣食のためではなく，神聖で崇高な目的のため工場に働きに行くことをそれぞれが理解していた[3]。

この大量動員をチャン・クゥアン・ヴィンはどのようにして実現したのかを解く鍵が表１に見ることができるものと思う。すなわち，救道救国革命を決意したときから，チャン・クゥアン・ヴィンは表１に見る全ての扶

鸞に参加している。カオダイ教における扶鸞は機筆（Cơ bút）というが，正確には機を請い（求機）筆を受け取る（執筆）儀礼であり，カオダイ教の神意をうかがう基礎をなすものである。「求機執筆」とは交霊方法であって，カオダイでは「通交方法」と称している。機筆には三種あるが，チャン・クゥアン・ヴィンが参加した機筆は「機筆教道（Cơ bút dạy đạo）」とおもわれ，書記もしくは証壇（Chứng đàn）に位置して参加したものと思われる[4]。特に，動員を前にした 1944 年 3 月 9 日に行われた機筆では，表 1 のようにカオ・ティェップ・ダオと教友タイ・デン・タインが霊媒となり，代表教師トゥオン・ヴィン・タイン，教師トゥオン・トゥオク・タイン，他 2 人の教友と 3 人の礼生，1 人の士才，律事 1 人，諸道 6 人という 17 名が参加しての大交霊会を行っている。まずは李大仙に，「崇高なる造化の主の意にかなって初めて遂行される本分を諸賢友にお教えください」と願いでて，李大仙は地球が「新秩序（Tân Trật Tự）」の確立に変化していることを説き，諸賢友の対応の在り方をトゥオン・チュン・ニュットに教えておくのでよく聞けとされて，交霊を終わり，次いでトゥオン・チュン・ニュットが降って，

> 緊急の時であるので，全道友の焼けつくような信と，全ての者が皆一つの本分とみなして，全てのことを集約して施行せねばならないであろう
> 悲惨，惨め，凄惨なことの半分は終わった，外人の世も信のために残り半ばであろう。だから男女の諸道友は，「新秩序」の人となることを期待するなら，もう少し我慢して身を修めて，暮らしに句読点を打ち最後の時期に苦しみに耐えよ。トゥオン・ヴィン・タインは何を尋ねたいのだ。ヒェン・チュンは，日本は外国を見送りたがっていると申されている[5]。

表１

	日　　時 降った霊	場　所	扶　鸞　Phò Loan	仕　壇　Hầu Đàn	仕　壇　Hầu Đàn	仕　壇　Hầu Đàn
1	壬午9月19日(1942年10月28日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Long Xuyên	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生タイ・ガップ・タイン Lễ Sanh Thái Gặp Thanh 礼生ゴック・フゥオン・タイン Lễ Sanh Ngọc Hương Thanh	正治事ヒィエン Chánh Trị Sự Hiền
2	壬午10月10日(1942年11月17日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Long Xuyên	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	3位教師トゥオン・ドゥク・タイン 3 vị Giáo Sư Thượng Đức Thanh 教師トゥオン・ヴィン・タイン Thượng Vinh Thanh 教師ゴック・ノン・タイン Ngọc Non Thanh	3位教友タイ・デン・タイン 3 vị Giáo Hữu Thái Đến Thanh 教友タイ・ハオ・タイン Thái Hào Thanh 教友トゥオン・カオ・タイン Thượng Cao Thanh	3位礼生トゥオン・ティ・タイン 3 vị Lễ Sanh Thượng Tý Thanh 礼生トゥオン・サン・タイン Thượng Sang Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Ngọc Hoai Thanh
3	壬午10月15日(1942年11月22日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	KIM BIÊN	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Thượng Vinh Thanh 士才フウイン・フウウ・ロイ Sĩ Tải Huỳnh Hữu Lợi	両派の全職色、職事、諸道友	
4	癸未6月29日(1943年7月30日), QUYỀN GIÁO TÔNG	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh	根拠地のほとんどの人員	
5	癸未7月1日(1943年8月1日), QUYỀN GIÁO TÔNG	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 根拠地のほとんどの人員	
6	癸未10月13日(1943年11月10日 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Thượng Vinh Thanh	教友トゥオン・カオ・タイン Giáo Hữu Thượng Cao Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 正治事チャン・ヴァン・クゥ Trần Văn Cử
7	癸未10月21日(1943年11月18日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 根拠地本部の諸道友	
8	甲申2月15日(1944年3月9日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 教師トゥオン・トゥック・タイン Giáo Sư Thượng Tước Thanh	2位教友トゥオン・ティエン・タイン 2 vị Giáo Hữu Thượng Thiện Thanh 教友タイ・ハオ・タイン Thái Hào Thanh	3位礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh 礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 礼生トゥオン・ズィン・タイン Thượng Dinh Thanh
9	甲申3月7日(1944年3月30日), QUYỀN GIÁO TÔNG	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 士才グウエン・ヴァン・ホイ Sĩ Tải Nguyễn Văn Hợi	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 教師トゥオン・トゥック・タイン Giáo Sư Thượng Tước Thanh	2位礼生トゥオン・ティ・タイン 2 vị Lễ Sanh Thượng Tý Thanh 礼生ゴック・ナム・タイン Ngọc Nam Thanh	正治事チャン・ティ・ダイ Chánh Trị Sự Trần Tỷ Đài 正治事レェ・ミン・カイン Lê Minh Cảnh
10	甲申4月3日(1944年4月25日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 士才グウエン・ヴァン・ホイ Sĩ Tải Nguyễn Văn Hợi	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 教師トゥオン・トゥック・タイン Giáo Sư Thượng Tước Thanh	2位礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh 礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh	正治事チャン・ティ・ダイ Chánh Trị Sự Trần Tỷ Đài 正治事レェ・ミン・カイン Lê Minh Cảnh
11	甲申4月4日(1944年4月26日), QUYỀN GIÁO TÔNG	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	士才グウエン・ヴァン・ホイ Sĩ Tải Nguyễn Văn Hợi	
12	甲申5月1日(1944年6月21日), TRẦN HƯNG ĐẠO VƯƠNG	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 士才グウエン・ヴァン・ホイ Sĩ Tải Nguyễn Văn Hợi	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 根拠地本部		
13	甲申7月4日(1944年8月22日), ANH CẢ đây các em	Saigon	教友タイ・デン・タイン Giáo Hữu Thái Đến Thanh 士才グウエン・ヴァン・ホイ Sĩ Tải Nguyễn Văn Hợi	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 2位礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 道友グウエン・トゥアン・フゥ đạo hữu Nguyễn Tuấn Phú	
14	甲申9月3日(1944年10月19日), CHƯỞNG ĐẠO NGUYỆT TÂM	Saigon	礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh	通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	
15	甲申10月19日(1944年12月4日), 大道三期普度李教宗 ĐẠI ĐẠO TAM KỲ PHỔ ĐỘ LÝ GIÁO TÔNG	Saigon	礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	グウエン・ヴァン・タイン Nguyễn Văn Thành	
16	甲申11月19日(1945年1月2日), 大道三期普度李教宗 ĐẠI ĐẠO TAM KỲ PHỔ ĐỘ LÝ GIÁO TÔNG	Saigon	礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh	通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	
17	甲申12月17日(1945年1月30日), 李大仙 LÝ ĐẠI TIÊN	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	
18	乙酉1月22日(1945年3月6日), 大道三期普度李教宗 ĐẠI ĐẠO TAM KỲ PHỔ ĐỘ LÝ GIÁO TÔNG	Saigon	礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh 礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh	通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	
19	乙酉2月21日(1945年4月3日) 大道三期普度李教宗 ĐẠI ĐẠO TAM KỲ PHỔ ĐỘ LÝ GIÁO TÔNG	Saigon	カオ・ティエップ・ダオ Cao Tiếp Đạo 礼生ゴック・ホアイ・タイン Lễ Sanh Ngọc Hoai Thanh	代表教師トゥオン・ヴィン・タイン Giáo Sư Đại Biểu Thượng Vinh Thanh 2位礼生トゥオン・ティ・タイン Lễ Sanh Thượng Tý Thanh	礼生トゥオン・ザイン・タイン Lễ Sanh Thượng Danh Thanh 通事グウエン・トゥアン・フゥ Thông Sự Nguyễn Tuấn Phú	

と諭している。この機筆が1944年3月9日であることに間違いがないとするなら，李大仙がいう「新秩序」とは大東亜共栄圏を指すものとも思われる。救道救国革命のためには，日本の大東亜共栄圏という新秩序に入ることにより，フランスの植民地政庁の弾圧から解放され，同時にフランス植民地支配を打倒する日本の動きに協力するために，機筆を通してカオダイ教タイニン派を動員しようとしたものと思われる。

日本の参謀部は，カオダイがフランス植民地政庁の弾圧から逃れるには日本軍の庇護が不可欠であることを知った上での動員要請であった。チャン・クゥアン・ヴィンも無謀な動員要請と知りながらも，拒否することもできずに要請に応えたものと思う。この動員は後述する「ニチナン（日南）」造船会社への動員であることから，参謀部とは日本海軍参謀部であるかと思う。難波千鶴はフランスのアクサン・プロヴァンスにある旧植民地政庁の資料を利用して，次のように指摘している。

> カオダイ教と日本との間の取引の際には，いつでも日本の保護を中止するという脅迫によって，日本は要求を更にエスカレートさせているように見える。あたかも日本のカオダイ教への保護と擁護が不可欠なので，カオダイ教は日本の要求を受諾する結果となった。しかし，カオダイ教の指導者たちは日本の憲兵の横柄な態度に堪えたが，日本憲兵の保護は実直なものではなかった。何よりもまず，日本はヴェトナムの独立を実現することを望んではいないということが，より一層カオダイ教徒を失望させた。カオダイ教の指導者たちは信徒たちに，「霊的メッセージ」では「落胆するな」そして「我慢しろ」と指導した。また，日本とカオダイ教との間の関係は，日本占領の間には維持された。カオダイ教徒たちは，信徒の忠誠心・宗教組織の力，そしてフランスに対する敵意によって，日本の理想的で忠実な協力者であった[6)]。

日本軍の「脅迫」に耐えながら，付表に示す扶鸞を使ってまで，信徒たちを励まし，我慢しろと説くチャン・クゥアン・ヴィンらカオダイ教指導部の苦衷もひとかどでなく，静謐保持を原則とする軍部と独立容認の外務省との軋轢に振り回されるヴェトナムの人たち，特にカオダイ教徒は，失望してもなお，復国のために「協力」をしたものと思われる。

(2)「ニチナン（日南)」造船会社を組織する

サイゴンに多大な労働力を動員することで造船労働を請け負ったカオダイ教は，サイゴンとショロンにカオダイ教青年団の拠点を設けた。その一つがサイゴンを流れるビンドン川に面した日南商船株式会社の造船場であり，昼間は「日南商船製造工場」という看板に隠れて日本軍から受注した木造船を建造した。資材は三井物産が供給し，完成した船一隻あたり20万～35万ピアストルを日本軍はカオダイ教タイニン派に支払った[7)]。これがカオダイ教青年団の生活・活動資金となったことは否めないが，カオダイ教青年一人一人に支払われたのではないものと思われる。カオダイ教青年団の活動は賃金労働としてではなく，救道救国革命のための神意に適った活動として無償で行われたが，その衣食に必要な生活費はカオダイ青年団から支出され，その救道救国事業の場が，日南商船株式会社の造船場であり活動拠点の一つと言えよう。LSDCDにはカオダイ青年団の活動としての記述は見られない半面，日南造船株式会社造船場における労働の様子については比較的詳しい記述がある。すなわち，日増しにカオダイ教徒の人数が多くなって，およそ3000人になったので，チャン・クゥアン・ヴィンは新たに日本軍と様々な契約書を締結した。カオダイ教徒は，まず一人一人が初めに鋸を受け取り造船所に赴き，最初は5艘，次いで10艘，そして20艘まで製作を受けもった。仕事は大変真面目に規則正しく組織的に行われた。当時の日南造船株式会社造船場はY字橋(cầu chữ Y)を横切って渡りラック（Rạch）埠頭に入らないと作業場の全景が見渡せないほどの

広さで，広大な区域の中には，組み立て小屋が縦横に一列になって並んでいて，一省毎に一列の組み立て小屋が配置され，造船所内の仕事は，省毎に組織された。その省出身の労働者数によって一列の建屋の数が決まった。

南部六省におけるフランス植民地政庁によるカオダイ教へのテロが増加したため，船会社を組織し終わると，各省のすべての宗務担当職色は，意思の堅固な省代表に相応しい人物を割り当て，作業場では各省が省毎に連絡委員会を設置した。宗務の行政職色は舟会社に割り当ての教徒を派遣するだけではなく，田舎から都市まで実際に動員する仕事全てに気を配らざるをえなかった。フランス植民地政庁の繰り返されるテロに，カオダイ教は予め計画した方針に従って秘密裏に仕事を行った。その秘密裏の仕事の仕方とは，一省毎に一隻の船を請け負い，完成した船名に自分の省名を付けられるばかりではなく, その船の船主に当該する省の指導的な仲間（Đầu Tộc）と管理会議（Bàn Trị Sự）を当て，財力に従ってその中での責任を分かち合わせるという仕事の仕方をとった。日本軍に引き渡すまでは，省毎の仕事や財力の自律性を尊重し競わせ，それを監督委員会（Ban Giám Đốc）（聖会の権（Quyên Hội Thánh））が労いマネージメントした。そして監督委員会の上に，最高指令委員会（Ban Chỉ Huy tối cao）（代表教師と本部（Giáo Sư Đại Biểu và Bổn Bộ））が位置した。この仕事の仕方によって，地位とその等級に従って整然とした秩序で，極めて有能な軍律と完全な信頼に照らして，行われた。それもそのはずで，船会社の中の 3000 人を超える人達は聖会の極めて忠誠な道友達であり，教えと国家に服務するために喜んで志願した青年達だからである。確かにここで仕事をすることは，衣食の差障りもあったが，毎月の聖会からの支援もあった。

(3) 内応義兵（NỘI ỨNG NGHĨA BINH）と近衛軍（CẬN VỆ QUÂN）を組織する指令

1944 年 8 月 25 日パリを守備していたドイツ軍は降伏し，ドゴールのフ

ランス共和国臨時政府が帰国をし，ヴィシー政府の閣僚はドイツにより拘束された。フランス植民地政府総督ドクーは密にドゴールに通じていたため，日本軍はフランス軍の蜂起の可能性に対処するために南方軍総司令部をマニラからサイゴンに移し 1944 年 12 月 11 日第三八軍を再編成した[8)]。クゥオン デェはこれをフランスからの独立の好機と捉え[9)]て内応義兵と近衛軍の組織化を手紙でチャン・クゥアン・ヴィンに指示したものと思われる。もちろん当時の郵便はフランス植民地政庁の検閲下にあったと考えるべきなので松下光広経由であったものと推察される。

それを裏付ける記事が LSDCD にある。すなわち，

> どのような時でも常に代表教師も畿外侯クゥオンデェ殿下に直接手紙を出した。内応義兵と近衛軍を組織するように殿下からの指令が下ったばかりであり，船会社の内容は完全になっており，また覚悟して志願した大多数の青年はその指令を期待しておる[10)]。

とある。このことは，明らかに内応義兵と近衛軍の組織化が畿外侯クゥオンデェの指令によるものであり，その目的とするところはフランスからの独立にあった。そのことを「ニチナン」で働く青年たちも承知し，期待していたことが知れる。それゆえチャン・クゥアン・ヴィンは労働力の動員に次いで，軍備を組織する能力の程度に関し指令を出し，船会社の運営は監督委員会（聖会）に任せることとした。そこで，監督委員会は，次のような指揮者を割り当てた。

1. 教友タイ・デン・タイン（Thái Đến Thanh），造船の監督
2. 教師トゥオン・トゥック・タイン（Thượng Tước Thanh），内応義兵総司令官
3. 教友トゥオン・トゥイ・タイン（Thượng Tuy Thanh），内応義兵副司令官兼近衛軍司令官

それぞれの指揮者には，忠誠と多少とも経験を積んだ多くの職色と道友が付いており，教友タイ・デン・タインは，表1から明らかなように1942年10月28日から1944年8月22日までの13回の機筆で霊媒を務めており，それ以降は造船の監督にあたったがため霊媒として機筆に参加しなくなったものと解され，19回の機筆全てに参加したチャン・クゥアン・ヴィンの救道救国革命の同志であり，信頼が厚かったものと思われる。また，教友トゥオン・トゥック・タインも1944年3月9日のカオダイ教徒動員直前の機筆から同年4月25日の機筆までの3回ほどチャン・クゥアン・ヴィンと共に壇に仕えていることが知れる。すなわち，チャン・クゥアン・ヴィンは股肱の同志や部下を造船監督者とカオダイ軍の司令官としたと言ってよいであろう。この一連の，救道救国革命が武力革命への準備として，畿外侯クゥオンデェの手紙による指令の下で，1944年8月22日前後に行われていたと思われる。

次に，LSDCDを参考にカオダイ軍の編制についてみると，内応義兵は18から40歳までから選ばれ，12人を一組に1班としている点では，昭和15年以降の日本の旧帝国陸軍の歩兵分隊と等しい編制であるが，12人を3班36人で1小隊としている点は異なる。帝国陸軍では4個分隊で1小隊を編制するが，4個分隊中の3個分隊は軽機分隊であり，1個分隊は擲弾筒分隊であった。当時の内応義兵と近衛軍の武装が竹やりに近いものであったので3班36名をもって1小隊とし，36人を3小隊108人で1個中隊とし，108人五個中隊540人で1個大隊として，それを一隊（Toán）と称したと思われる。それぞれの隊には先覚者や英雄の名前をとって特別の名前がつけられ，チャン・フン・ダオ王隊（Toán Trần Hưng Đạo），レェ・タァ・クゥアン隊（Toán Lê Tả Quân），徴女王隊（Toán Trưng Nữ Vương）等々のように名付けられたようだが，帝国陸軍では，大隊名はない。当時はそのようにして6隊（3240人の戦士）が組織され，この6隊が総司令官の指揮権の下に置かれた。

近衛軍は，内応義兵の中から 108 人を選出したクゥオンデェの特別な道兵（Đạo Binh）で，特別な服の色をしており，内応義兵より優越しており，先頭に 1 人の尉官がいた。尉官ということから帝国陸軍でいえば，中隊規模と考えられる。近衛軍も同様に総司令官の指揮権の下に置かれ，近衛軍の道兵は十分な訓練を受け，他の道兵の模範とされた。

またLSDCA に「一人の道兵が畿外侯クゥオンデェ殿下のお側近くに仕えた」[11]とあることから，近衛軍の仕えるべき対象が，バオダイ帝ではなくクゥオンデェであることがわかる。加えて当時のカオダイ軍（Quân Đội Cao Đài）には 2 万人以上の志願者がいたとのことから，ニチナン以外の造船所や各省で極めて秘密裏に組織された潜在的な道兵の規模はおよそ 2 万人を超えることが知れる。

ただ，近衛軍の 1 人が日本にいたクゥオンデェの側近くに仕えたとあるが，この近衛兵を明らかにする資料はいまだ知られていない。

(4) 訓練の時期

カオダイ教における武力組織の形成は，日本の仏印処理が検討され始めた 1943 年末にカオダイ義勇軍として組織化が進み，1944 年 6 月～ 8 月前後に内応義兵や近衛軍として組織される前から，訓練が始まっていたようである。すなわち，およそ半年強の訓練期間があり，その間は船会社にいた 3000 人以上のカオダイの青年たちは，日中は各工場の中で働き，夜は竹槍を手に軍事教練に励んだだけではなく，フランスや日本の多少とも経験のある旧戦士を訓練教官とする軍人の訓練を受けるための（暫定）軍事学校で学んだ。この時にはすでにカオダイの上下士官（Thượng - Hạ Sĩ Quan Cao Đài）組織があり，授業内容は，次のような内容であった。

防諜（Phòng Điệp），

偵察（Trinh Thám），

待ち伏せ攻撃（Phục Kích），

城（都市）を陥落させる（Hãm Thành），

敵軍に肉薄して攻撃する（xáp lá cà）

このような前線の戦闘以外の様々な戦術の学習と訓練は，ヴェトナム語で呼ぶための名詞を作って行われ，訓練を受ける者は皆二つの講義を取って，周到かつ十分な訓練を積んでいた。中でも，グゥエン・ヴァン・タン（Nguyễn Văn Thành）とグゥエン・タン・フォン（Nguyễn Thành Phương）の 2 人は，この訓練の中で首席の功績を得た者であった。

訓練は軍事面について行われたが，道徳的精神面については，チャン・クゥアン・ヴィンが以下のような人物を含む特使班を用意した。

礼生トゥオン・ティ・タン（Thượng Tý Thanh）

礼生ゴック・ホアイ・タン（Ngọc Hoai Thanh）

礼生トゥオン・ザイン・タン（Thượng Danh Thanh）

正治事グゥエン・ヴァン・グゥ（Nguyễn Văn Ngưu）

正治事グゥエン・ゴック・アイン（Nguyễn Ngọc Anh）

通事グゥエン・ヴァン・タン（Nguyễn Văn Thành）

通事グゥエン・トゥアン・フゥ（Nguyễn Tuấn Phú）

毎日この特使班は皆交代で船会社に 1 人 24 時間チャン・クゥアン・ヴィンの代理として勤務した。それはチャン・クゥアン・ヴィンが，国家に服務する中で勇敢にも犠牲となる精神を鍛えるためであり，同時にチャン・クゥアン・ヴィンが 20 省の兵営を訪問して国家や時事問題や道徳について努めて繰り返し説明し，日々のゆるがせにできないニュースを伝えるためであった。その結果，たった 6 ヶ月の間に，船会社日南の大変多くの労働者が，急速に戦闘的で勇敢かつ強力な道兵に成長した[13)]。

LSDCD によれば，1945 年 1 月 1 日にカオダイ教の閲兵が行われ，船会社の中で大事業を前に明らかな指令があったとされるが，その司令内容は具体的には明示されていない。大事業とは明らかに救道救国革命の一部に当たる明号作戦のことと思われる。1 日の様子は，9 時ちょうどにチャン・

クゥアン・ヴィンと随行員の一団が日本軍の司令官と共に会社の全てを一緒に視察し，その視察は閲兵に等しいものであった。それぞれの兵士は隊列に従って住居の両側にそれぞれ家屋ごとに整列し，ざっと検閲したあと，各隊は総司令部に立ち戻った。チャン・クゥアン・ヴィンは上下士官と行政職色を集めた集会で演説をし，この演説は全体の精神を高揚させ前進させるものであった。日本の司令官の視察についていえば，司令官は大変称賛し，限りなく感服し，南部人の精神は日本人に劣るものではないと言ったとある[14)]。たった6ヶ月の訓練でこの日の閲兵に耐えるまでに成長したということは，1943年末に誕生したカオダイ義勇軍は，約6ヶ月の訓練の後の1944年6月から9月前後に内応義軍，近衛軍として成立したものと考えてよいものと思う。

この視察の翌日1945年1月2日に，サイゴン根拠地で機筆が行われ，大道三期普度李教宗（ĐẠI ĐẠO TAM KỲ PHỔ ĐỘ LÝ GIÁO TÔNG）が降り，迷うことなき本分の遂行を説き，更に同年1月30日にも李大仙が降り，カオダイ教徒を励ましたことは表1から知れる。タイニン派のカオダイ教徒は，ことごとく復国同盟会の党員となり，クゥオンデェのための軍として組織されていた。

(5) クーデター（1945年3月9日）の時期とその計略

憲兵中佐林秀澄は1944年10月末，帰任した河村参謀長から当時「マ号作戦」と称されていた仏印武力処理の作戦後の政務について12月10日頃を目処に計画概要を作成してほしいと命じられた[15)]。一方戦局の悪化に伴い，仏印をタイ，マラヤ，スマトラと並ぶ南方の中核地域と位置づけ，本土決戦に備えた南方持久抵抗拠点とし，1944年12月20日に印度支那駐屯軍は野戦軍編成に改編され第38軍とされた。このことは，この後の仏印武力処理のあり方において，軍中央の意向がより反映し易いこととなった。それゆえ上述した1945年1月1日の視察は，明号作戦を前にし

た準備状況の把握と解しえる。その実施については，1月17日に「対仏印武力処理及処理後ノ防衛ニ関スル陸海軍中央協定」が締結され，南方軍に提示され武力処理が決断された[16)]。インドシナの解放は，戦局の最も重要な要点の一つであったが，フランス政府が継続して経済的・軍事的な主権を握っており，日本軍の進駐経費もフランス植民地政庁が少なからず支出していた[17)]。ヴィシー政権の崩壊により日仏間の諸協定が無効となり，1943年10月にはドゴール派の解放委員会が仏印の「解放」に参加することを決意し，12月には同委員会がインドシナ政策を発表した。このような状況の中で，現地軍と，外務省・大使府の二つの機関から仏印武力処理案が検討された[18)]。1944年10月20日連合軍はフィリピンのレイテ島攻略に着手し，1945年3月3日にはマニラも陥落している。このような戦況の中，仏領インドシナの領土に英米が敵前上陸をすれば，日本は内攻外撃の災いを避けて逃れることはできない状況となっていた。このため，2月1日の最高戦争指導会議で，日本軍はクーデターという形で1943年以来可能性を検討してきた仏印の武力処理を行うこととしたが，2月26日の「印度支那政務処理要綱」の決定でも，「即時独立」を付与するものの陸軍中央には「独立施策」を内実あるものにする考えは全くなかった[19)]。日本軍はクーデターという形で新たにフランス軍の武装解除をしたが，それはヴェトナムの人々をフランス植民地支配の軛から解放するためではなく，ただただ軍事的な状況変化への対応のためであった。それでも，カオダイ軍は，クーデターに当たり日本軍の手足となり準備・協力したことが，LSDCDの次の記述から知ることができる。

> カオダイ軍は日本軍と妥協して，クーデターの時に日本を支援することを約束した。2～3ヶ月前に対処されたカオダイ軍の行動綱領の中で，スパイ班（Ban Trinh Thám）は活動を激増し，内応義兵と近衛軍は極めて厳しく訓練された。宣伝班（Ban Tuyên Truyên）はまずそ

> れぞれの省に下り，サイゴンにある無線電信放送局が軍事占拠された時，代わりをする人を用意した。船会社では，「最新」の武器である真竹の末端を先が鋭く尖るように斜に切って棕櫚縄を巻きつけたものをそれぞれの戦士に配るに十分な数を調達する用意が整えられた[20)]。

とある。すなわち，1月1日の視察以前に，明号作戦におけるカオダイ軍の支援・協力が約束され，視察後の翌日の1月2日と1月30日，そして行動開始の3月6日に機筆が設けられた。1日の視察に続きカオダイ軍の行動綱領が発表され，それに基づいてスパイ班・宣伝班，内応義兵等の訓練，竹槍の調達が行われ戦闘準備に当たった。

1945年3月6日，明号作戦に先立つこと3日前，チャン・クゥアン・ヴィンと計画を練り終えた後，日本軍の大型トラックが来て，命令によって待機している日本軍の中にカオダイ軍も身を隠して駐屯するために，内応義兵は各省に分配され一団毎に運ばれた。この作戦配置はごく秘裏に行われたので，どこに運ばれいつ頃何をするのかも兵士には知らされなかった。遠い省から移動し，1945年3月9日の午後になって，サイゴン - チョロン地区は秘密裏に封鎖されたが，誰も分からなかった。この時，チャン・クゥアン・ヴィンと日本参謀部の5人の士官が自動車に乗って各地の対応を視察し，万全を期して対処した。

この明号作戦[21)]の計画的・組織的な準備の下で，3月9日夜の8時から9時に至り，日本軍の自動車が激しい勢いで地方に動員され，フランスの軍事・政治機関は緩やかな方法でことごとく包囲された。時を同じくして，日本の松本特使と海軍提督ドクー（Thủy Sư Đô Đốc Decoux）は仏領インドシナ総督府（Phủ Toàn Quyền）で会談をし，日本の提出した諸条件[22)]はフランスの心に適うものではなかったようで，両者は決裂した。松本は別荘に戻り，ドクーは人を派遣してフランスがこの諸条件を受け入れないことを明らかにした。それに続いてたちどころに銃声が響き，仏領インドシ

ナ総督府は包囲され海軍提督ドクーは最初に逮捕され，各政治・軍事機関で各フランス人の要人がことごとく逮捕された。一・二の場所で抵抗があり，命を落とさざるを得なかった者が若干フランス人にいたことが，サイゴン - チョロン地区における明号作戦の概要であることを LSDCD から知れる[23)]。

この間，カオダイ軍は，攻城と反乱を呼びかける宣伝で活躍し，フランス人を捕縛するという任務を遂行し，何の障害もなくどのようなフランス人をも，皆人道に基づいて捕縛した。3 月 9 日の夜，サイゴン - チョロン地方では，9 時から夜中の 12 時まで銃声が聞こえたが，それはクーデターがたった 3 時間で静まったことを意味していた。日本の軛は依然としてあることをカオダイは分かっていたが，一つの重い荷物を担ぎ終えたとの認識が，解放の喜びとその一翼をになった誇らしさとともにあったものと思われる。それは，1945 年 3 月 10 日の朝には昨日までのフランスの各行政公署と各兵営には，皆白い短めの衣服の上下を身につけ，白いツバのない舟型軍帽を冠り，手に真竹を握ったカオダイ兵がきちんと各処の警戒に当った。カオダイ教が 3 年間に亘る日本との協力によって得た一つの結果であり，それは当時のカオダイ教タイニン派が心待ちにして望んでいるものであったことを民衆に知らしめる一つの印であった。確かに，カオダイ教徒のみならず多くのヴェトナムの人々にとってフランス植民地主義の軛から解放されたことは，文字通り心待ちにしたことであり，その実現の朝これまでの支配者であったフランス植民地政庁の関係機関に揃いの白衣と白い舟形軍帽をかぶったカオダイ兵が立哨しているさまは，驚嘆に値するものであったと思われる。その様子は

首都サイゴンから各省の中心都市まで，日本参謀部の指揮の下でカオダイ軍は活動を公開し始め，カオダイ軍は祖国の秩序と安寧を回復するために日本軍と協力して仕事に当たっていた。当時のカオダイ軍

は船会社から多くの基地に分散駐留しており，日本の参謀部はカオダイ軍に多くの基地の管理を任せていた。

ルフェーヴル（Lefèbvre）通り[24] 152番地のカオダイ軍根拠地では，狭苦しい階上の一部屋しかなく，政治各界の知識人や上流社会の方や，時勢の顧問になっている方や，成功を祝いにきた方々など，いつも大勢が集まって賑やかであった。その他にも，臨時政府（Chánh Phủ lâm thời ）を歓呼したり，協力して仕事をしたいと求めたり，事務所を求めたりするために，根拠地の門前には大変多くの階層の群衆が黒山のように一斉に集まっていた。

本当にその当時のカオダイ教は実に誇り高く光り輝いており，名声は南天の果てまで響きわたっていた。そのような状況を踏まえて日本政府は，カオダイに信仰の自由権を復権し宗教の範囲の中で各特典を享受することができると正式に公布した。すなわち，聖座から各浄室まで，各事務所は福善（Phước Thiện）機関と共に皆落ち着いて供え献ずることができ，職色は教えを行うこと（hành Đạo）を自由に伝えることができた。民衆は喜んで信任し，各地で皆勢い良く入門した[25]。

とあり明号作戦後に，あたかもカオダイ教徒が率先して日本軍を動かしフランス植民地政権を打ち破ったかの印象をヴェトナム民衆に与え，多くの信徒を獲得し，信仰の自由をも確立できたことで，救道救国革命の一部が達成されたと認識していたことが知れる。ただ，カオダイ教の中に作られた「協力機関」は復国のためのものであり，クゥオンデェの内応義兵や近衛軍創設の指令も，クゥオンデェを元首に迎えての独立の達成を狙っていたにも拘らず，今一歩届かないもどかしさに苛立ち・呻吟していたものと思われる。すなわち，3月11日には，バオダイを皇帝とするヴェトナム帝国が成立し，8月23日まで日本軍の傀儡政権として維持された。4月17日にはチャン・チョン・キムを首相に任命した。チャン・クゥアン・ヴィ

ンは越南復国同盟会の南部における代表であったことを考えると，バオダイをクゥオンデェに変えずに[26]元首とするという1945年1月の「仏印統治計画案」[27]を逆転させた武力処理は，カオダイの期待への一面の裏切りを意味する。とするなら，親日のゆえに明号作戦を支援したのではなく，あくまで越南復国同盟会の意向に沿った対応であり，タイニン派カオダイ教徒にとっては救道救国革命の中での民族独立への一段階として遂行されたと解することが妥当であろう。

6. 仏印処理後のカオダイと日本

(1) トゥオン氏の庭園（VƯỜN ÔNG THƯỢNG）[28]へのデモ

積年の桎梏から解放されたヴェトナム民衆の喜びとその中でのカオダイの対応は，二つ目の軛を外すために，民族的エネルギーを蓄積して平和的なデモで実現を目指すことにあったものと思われる。すなわち，完全独立に至るために，民族精神が十分な団結勢力を得ていることをはっきりと示すために，カオダイ教は「越南国家独立党」（Việt Nam Quốc Gia Độc Lập Đảng）と力を合わせてトゥオン氏の庭園で巨大なデモを組織した。

明号作戦からわずか9日後の1945年3月18日，各政治党派，各宗教，各行政公署の公務員，各商会とともに各工場の民衆の各階層をトゥオン氏の庭園に結集した。各団体が互いに「ヴェトナム独立」（Việt Nam Độc Lập），「フランス帝国主義打倒」（Đả Đảo Đế Quốc Pháp）等々を歓呼し多くの横断幕を掲げて集まった。この日の各道路とトゥオン氏の庭園に至る各門にカオダイ兵を配置して警備に当たり，カオダイ軍も長さ三km近くの揃った隊列を組み，厳かな軍服を身にまとい，「内応義兵」，「近衛軍」，「斥候団」（Thám Tử Đoàn），「赤十字」（Hồng Thập Tự）等々の順にデモ行進をした。9時丁度に日本政府代表の役人や政治各界各党派の党首，上流社会

の知識人やほとんどの重要人物も全員観客席に揃い，通りの反対側の観覧席の祖国を祀る「越南」の大看板の前とヴェトナム国旗の下には，特別の軍服を着て，頭には黄色い舟型軍帽を冠り，白い衣服と皮のベルトをし，真赤なゲートルを巻き，黒い靴を履いた近衛兵が立っており，この集会がカオダイ教を中心に運営されている様子を，LSDCD は伝えている[29]。

加えて，そこでの演壇に立った人と演説の概要が次に知れる。すなわち，フゥイン・ホアイ・ラック（Huỳnh Hoài Lạc）氏がデモの意義を説き，「国家独立党」党首ホォ・ヴァン・ガァ（Hồ Văn Ngà），青い道服[30]を身にまとったカオダイ教代表教師チャン・クゥアン・ヴィン，各愛国グループ代表ファン・ヒィエウ・キン（Phan Hiếu Kinh），カオダイ軍司令官代理グゥエン・ヴィン・タイン（Nguyễn Vĩnh Thanh），ヴェトナム青年と日本人学生の代表ズィエプ・バァ（Diệp Ba）が皆デモを祝う演説をし，解放の大事業に続いてヴェトナムの完全独立に至るための団結を呼びかけた。演説の度に群衆は拍手と熱狂に湧き，地域全体に轟き渡る歓呼の声をあげた。

デモは，正午の 12 時になって解散し，カオダイ軍は市内全域に渡って軍事パレード[31]を行ったので，カオダイの名声はますます広まったようだ。民族エネルギーの結集の先頭に立ちリードするカオダイ教の様子と，完全独立を目指し，その道を整然として揃いのユニフォームで行進して示す[32]のは，第二の軛を外して救道救国革命を完遂するためであったものと思われる。しかし皮肉にも，この解放祝賀デモは日本軍当局に禁止されていたし，旧王朝の国旗は棄てるよう命令されていた。南部ヴェトナムは日本の植民地であり独立などは許されないと冷たく突き放されている[33]中での独立への示威であった。

(2) 日本軍がヴェトナム人を表彰する

仏印処理を断行しても軍事的な劣勢は止めうべくもなく，「親日勢力」を味方につけておく必要があった。そこで，速やかな論功行賞が一つの懐

柔策としてとられた。すなわち，3月9日から日本人が，各愛国的グループを支援し，各機関の中でこれまでの日本との協力・支援を表彰した。特に明号作戦に参加した一員であることから，1945年4月12日に参謀部は，チャン・クゥアン・ヴィンを含む9人を招き，司令部で表彰式を行った。突然ではあったが，チャン・クゥアン・ヴィンはその日に1個小隊に軍事パレードをさせた。解放祝賀デモは禁止された中でのパレードは痛烈な自己主張とも解される。論功行賞のお祝いパレードであれば，日本軍も取り締まれない。表彰式後のお茶の会に参加した時，チャン・クゥアン・ヴィンは功績を語る演説文を読み，それぞれの参加者の胸に一輪のバラの花と，あらかじめ用意した金一封を授けた。この中でカオダイ教は最も大きな功績をあげたと思う。チャン・クゥアン・ヴィンも，9人を代表して，またすべてのヴェトナム愛国分子を代表して，フランス帝国主義からの解放に当たって日本軍に感謝を述べたことが，LSDCDより知れる[34)]。また，1945年3月9日夜に，

> 一隊は火力発電所へ，西川は二十人の青年部員を率いて南部デルタ地帯の要衝，タイニンに向かい，タイニン市庁舎のフランス兵を排除，市政全般を臨時代行し，南部デルタ地帯のフランス兵掃討作戦に従事した。カオダイ教徒の協力は作戦終了後の司令官表彰で「第一位」となった[35)]。

と記して，上述の内容を裏付けている。ただ，この5日後の1945年4月17日にフエのバオダイ帝はチャン・チョン・キムを首相に任命し，独立という虚構を作った経緯を見ると，チャン・クゥアン・ヴィンの表彰は，消極化しつつある親日ヴェトナム人の対日協力をつなぎとめるには必要であったことを意味していた。

(3) ヴェトナムの内閣（TÒA NỘI CÁC VIỆT NAM）設立の件

明号作戦以前に「仏印統治計画案」によりバオダイ帝が独立後の越南帝国の帝位に就くことは決まっていた[36]事実からすれば，明号作戦後にチャン・クゥアン・ヴィンを顧問として越南帝国の人選を進めたというLSDCAの記述は[37]閣僚レベルに限られたものと思われる。すなわち，仏印処理後，ヴェトナムの内閣を立ち上げるために日本軍は引き続いて人材を召集せねばならなかった。皇帝（Hoàng Đế）の位は内閣の源の問題であり，日本の信任を得た人物を選ばねばならなかった。当時，バンコクやシンガポールには，親日的と言われたチャン・チョン・キム（Trần Trọng Kim），グゥエン・ヴァン・サム（Nguyễn Văn Sâm），チャン・ヴァン・アン（Trần Văn Ân）といった人物がおり，カオダイ教が以前から保護してきた方々が，海外において順を追ってかわるがわるに帰国の案内を得ていた。今日新たに内閣を組織するに当たり，参謀部は顧問として人材を選ぶために，チャン・クゥアン・ヴィンを招いた。カオダイ側から見ると，チャン・クゥアン・ヴィンは完全に乗り気ではなかった。情勢のせいで，カオダイは政治的な動きをせざるを得なかったが，カオダイ教の目的とするところは全国的な独立と自由を回復することにあり，その他には地位や権力に関心はなかった。そのために，チャン・クゥアン・ヴィンは各政治党派の中から内閣に参加するための人材を選び，保証した。それは世俗のことに関するチャン・クゥアン・ヴィンの重い荷物を軽減するための目的でもあった。さらにチャン・クゥアン・ヴィンは教えが本質を示して速やかに世俗を導くよう，多くのことにも心を配らねばならなかった。当時の内閣の人員の大多数は氏が推挙をし，日本政府に対して保証したのはチャン・チョン・キム，グゥエン・ヴァン・サム，チン・ディン・タオ（Trịnh Đình Thảo），ホォ・ヴァン・ガァ（Hồ Văn Ngà），グゥエン・テエ・フォン（Nguyễn Thế Phương）のような方々であり，ことごとくヴェトナムの内閣の政治家たちであった。独立した越南帝国の内閣がカオダイの代表教

師であるチャン・クゥアン・ヴィンの目にかなった人物が推薦されて入閣したという印象がLSDCDには必要であったが故の記述と思われる。もっとも，白石昌也は，

> チャン新首相がバオダイ皇帝たちと相談して決めた閣僚メンバーは，あまり名前の知られていない若い知識人や技術者が中心でした[38]。

と評している。

(4) カオダイ軍事参謀部の組織

カオダイの名声が高まり，新たな帝国の自立が求められる中で，市内や郊外の治安維持はことばの通じない日本軍では難しいため[39]カオダイ軍を公認し，治安維持を委嘱する体制の確立が求められたものと思われる。カオダイ軍の活動は日増しに影響力を加え，人道的行為によって多数の群衆が信頼を寄せ，当時のヴェトナム南部で最も影響力を持った党派の一つでもあった。それゆえ日本当局は正式にカオダイ軍をヴェトナムの軍隊として承認し，特別に参謀部を組織することを許可した。この命令を得て，参謀部の組織と人員の選抜のために，職色聖会と上下士官の全体集会が公開で俄に開かれた。チャン・クゥアン・ヴィンは全体の信頼を得て直ちにカオダイ軍総司令の職を兼務し，他の各部に関しても，功績があり忠誠に富んだ上下士官と職色が責任を負って職に就いた。同時に日本当局は，カオダイ軍の基地とするためにある住所（ブールバルド・ノロドム通り6番地(No. 6 Boulevard Norodom)[40]）を引き渡した。そこは以前のフランスの第6管区の要塞であった。以前の第6管区の別荘は，現在代表教師兼カオダイ軍総司令官チャン・クゥアン・ヴィンの別荘とされ，参謀部の事務所は配置換えされた。その場所には多くの建物があり，本部の人員や，官庁を警戒するためにここに駐留する近衛軍のための所在地とされた。このよう

な経緯で，カオダイ軍の参謀部は成立し，第 6 管区の要塞の門前には「カオダイ参謀軍事務」(Cao Đài Tham Mưu Quân Sự Vụ) と題字した驚くほど大きな看板が立てられた。要塞に入る門に通じる各通りには，カオダイ兵士が極めて厳重に警戒していた。大きく広く長い事務所の中は，下に行っても上にいるようで，何百人に及ぶ書記が手伝っており，全職員の机と椅子は厳密に秩序立って配置されており，皆軍服をきた上下士官が行ったり来たりし，大変生き生きとやかましく仕事をしていた。ほとんどの民衆の希望は，皆ヴェトナム国の独立を強固にするための十分な勢力と条件を持っていると想われるカオダイへの希望であったと LSDCD にある[41)]。このことは，一宗教の私兵団体という性格から，新独立帝国の民族的準軍事集団として認知されたことを意味している。

しかし，『週刊みくに』9 月 25 日号「仏印処理その後」によれば，

> そのころ，カオダイ教の勢力は，祖国独立をめざして軍隊組織化を志向しつつあった。日本軍も，軍夫，または後方勤務要員として，彼等による部隊編成を考えていた。松下光広は，サイゴン駐屯第三十八軍（略称信部隊・司令官陸軍中将土橋秀逸（ママ））から要請を受けて，その総指揮をとることになった。大南公司社長松下光広は，一時期，三十六箇中隊，四千名にのぼった現地人大部隊 = 高台教奉仕隊の司令官に就任したのである。副司令は，カオダイ教指導者チャン・カン・ビンであった。非武装組織だったけれども，朝夕は簡単な軍隊教練を行い，昭和二十年（一九四五）日本軍による仏印処理後，つまりフランス軍武装解除後は，総本部をフランス軍司令部跡に置き，市中の治安維持も担当するようになった。松下の奔走で，日本軍当局から，一人二十ピアストル（邦貨換算約四十円）の月給と，被服（現物），米（同）副食物（現金）の支給を受けるようになった。

とあり，チャン・クゥアン・ヴィンの上に司令官としてクゥオンデェの盟友でありメッセンジャーであった大南公司社長松下光広が位置している。第38軍から請け負うための肩書であり，松下の郷土天草の記事の故の記述であろう。続けて『週刊みくに』9月25日号「仏印処理その後」には，1945年7月8日付けの高台教奉仕隊関係文書を掲載している。すなわち，

《高台教奉仕隊関係文書を一通，例示。信指令の発令者は第三十八軍河村参謀長》
信阪後第二十三号
高台教奉仕隊編成ニ関スル件

昭和二十年七月八日信部隊参謀長
公印
松下光広殿
首題ノ件，左記ニ準拠シ，奉仕隊ヲ編成シ，軍ノ作戦準備ニ奉仕スル如ク指導相成度。

左記

一，編成基準及奉仕隊駐屯地
（一）　一隊約100名トシ，細部ハ奉仕隊ニ於テ定ムルコト。
（二）　駐屯地及部隊数

ショロン	四隊	サイゴン	六隊	ヂャーデン	五隊
ビンホア	二隊	タイニン	八隊	タイピン	一隊

二，奉仕隊ニ対スル奉仕業務ハ，信指令所長之ヲ命ズ。各地駐屯軍隊ノ指揮官，奉仕隊ヲ使用セントスル時ハ，信指令所長ニ対シ要求スルモノトス。
三，奉仕隊ノ取扱ニ就テハ，昭和二十年五月四日参丙第百三十三号高台教奉仕隊取扱要領ニ関スル件ニ拠ル。右規定ニ拠ル担当部隊ハ，信

指令所トス。

四，奉仕隊編成ノ細部，人員の異動，奉仕業務ノ状況等ハ，其ノ都度報告スルモノトス。

戦争前から戦争中を通して，彼は，日仏協会（在東京）常務理事，西貢（サイゴン）日本人会長あるいは理事，日本人商工会議所会頭などの地位にあり，日本軍が，ベトナム現地経済人の協力を得るには，彼の見識にしたがう以外になかったのである[42]。

とある。以上の記事から，土橋勇逸中将が第38軍司令官に着任した1944年12月20日以降に，軍夫または後方勤務要員として高台教奉仕隊に治安維持機能としての活動が期待されたものと思われる。また，高台教奉仕隊長に松下光広がついていることは，「日本軍が，ベトナム現地経済人の協力を得るには，彼の見識にしたがう以外になかった。」という名目的な理由によるもので，そのためにカオダイ側の資料には何の記載もないものと解される。また，発令者である第38軍河村参郎参謀長は1945年3月中将に進み，7月第224師団長に転出し，編成中に広島で終戦を迎えた。河村参謀長が出したものでないという資料はないが，時期的には些かの疑義が残る。

(5) クゥオンデェの歓迎式典を組織する

「当時，ベトナム民衆の間では独立が達成された暁にはクォン・デが日本から舞い戻ってきて，バオダイに替わって即位すると当然のようにイメージされていた。実際,「明号作戦」直後に,サイゴンでは住民たちが「街路に緑地赤玉の『越南復国同盟会』の旗をかたどった大歓迎アーチを作って」，クォンデェの帰国を待ち望んでいた。」との西川寛生[43]の証言通り，クゥオンデェ待望論があった。帰国を阻んでいたのは第38軍司令官土橋勇逸であった[44]。その事実を知らない当時のヴェトナム民衆の一部は，クゥ

オンデェの帰国とクゥオンデェによる独立の時代がくるものと多くが期待していた。しかし日本人は長く引き伸ばそうとしたため, チャン・クゥアン・ヴィンは国内政治家と協力して何度も日本参謀部に出向き，クゥオンデェの帰国問題について話し合いで決めようとした。バオダイには国内政治を掌握する力が十分にはなく，民心が疑う処があるように思っていたので, 日本の参謀部は妥協した[45)]。クゥオンデェについては，全体が待望していたが，バオダイを転覆させることはできないので，クゥオンデェを摂政の位[46)]に付け，バオダイの仕事のために最高指揮権を振るえるようにする必要があるとの点で, 双方が同意し, 議論は良い方向で解決を見るようになった。東京からクゥオンデェが直ぐに帰国するつもりでいることを明らかにする電信が入った。

そこで，チャン・クゥアン・ヴィンは教えの全てにクゥオンデェ帰国の通達を送り，盛大な歓迎式典を準備するよう用意を整えた。ただ，クゥオンデェはカオダイ教の個人的な人であるべきではなく，ヴェトナム国民全体の人であるとチャン・クゥアン・ヴィンは密かに思っていた。さらに，社会の諸々の階層の人達と広いパイプを開通させるために，どんな時期であってもカオダイ教は常に国内諸党派の各政党全てと調和する態度を保っていた。この式典を理由にして，チャン・クゥアン・ヴィンは，歓迎式典準備委員会を組織するに当たって特別なグループに偏らないように，国内のほとんど全ての政党と，華僑をも含む民衆の各階層を召集した。この委員会の中で，全体でチャン・クゥアン・ヴィンを主席（Chủ Tịch）として信任することが決められた。諸政党全部が参加したとは言うものの，実際はプログラムの対処からその順番まで，ほとんど全てはカオダイの働きによっていた。

どれほどもせずして，国家を祀る廟の後方に，大変威厳を備えて輝いている凱旋門（Khải Hoàn Môn）ができあがり，カオダイ兵士が注意深く警戒に当たった。あらゆる民衆が凱旋門を通ったが，皆車に乗って両側の小

門を行くのみで，大門を選ぶことを禁じられた。式典に出席する人数を推計すると，ライン氏橋（cầu Ông Lãnh）からY字橋（cầu chữ Y Y）にかけて犇めき合って停泊している艀や，汽船や自動車で行く人もいれば，六省の客を収容している食堂を兼ねた宿屋や旅館にいる人や，都市への道を5グループ・7グループとなって上るグループの人達が，男も女も皆こぞって胸の前にカオダイ教の人間である徽章を身につけていることが認められた。その徽章とは，カオダイ教が政治的な動きをした時期に大きな功績のあった人に贈られたものであった。（当時，クゥオンデェが帰国する確かな日の知らせをいまだに知らなかった。）

当時は時を同じくして，「クゥオンデェを擁護して王とし，社会の進化に逆行する時代遅れの君主制度に民衆を引きずりこむために組織された式典であり，目標もなくこせこせと実行するものだ」とヴェトミン派（Đảng Việt Minh）は反対して，宣伝ビラを撒いて歓迎式典の開催を厳しく批判した。

それに対しカオダイは，「ヴェトナム国の独立の回復に仕えフランス植民地制度を転覆させる闘争のために海外で四十年に渡り放浪した本物の愛国者を歓迎するための式典であるのみであり，王（Vua）を主（Chúa）とするのかあるいはどのような政体に従うのかに関して，あるいは国会に関して，ヴェトミン派は些か早急に攻撃し過ぎている」と反論した。多くの障害に会いながら，歓迎式典実行組織は着実に進行し，人心はひたすら熱中していった。しかし，民心は，国際情勢を予測することなど分からなかった。日本が降伏したというニュース（一九四五年八月一五日）は全世論を震撼させ，この歓迎事業は必然的に影響を受けざるを得なかった。この状況が分からないままクゥオンデェの帰国についてどのように論じあったらよいのか。クゥオンデェの消息は何一つ得られなかった。（日本人の知らせでは，すでにクゥオンデェは台湾（Đài Loan（Formose））まで戻っていたが，道程を一旦やめねばならなかったようである。）[47]とLSDCDにあり，物資不足とインフレが進み，ヴェトナム経済が混乱に陥って[48]仏印処理後

の不安定な状況の中でのクゥオンデェ待望の様子を窺い知ることができる。

(6) 日本の降伏

日本の軍事力を利用して，救道救国路線を志向しようとしたカオダイ教タイニン派にとっては，またフランス植民地主義の軛を一夜にして外した日本への期待が膨らんでいた矢先だけにヴェトナム南部の多くの民衆にとっては，日本の降伏はショックであった。カオダイ教は，4年間日本と協力して事業を行なった。1945年8月15日，日本はポツダム宣言を受諾し9月2日に降伏文書に調印した。必然的にクゥオンデェ帰国歓迎式典も影響を受けた。日本と協力して仕事をしていた時，カオダイは敢えて植民地制度の軛から抜け出し全体を解放するために，強国を利用する目的を持っていた。日本の降伏は，ヴェトナムにとって日本の軛を直ぐに剥ぎ取ることのできる良い機会でもあった。カオダイ教の救道救国革命は信仰の自由と民族の自由を求めたに過ぎない。ただ，そのあり方はクゥオンデェの越南復国同盟会の指令に従ったものであった。それゆえ，日本の降伏問題に対しては，カオダイ教は失望してはいないが，ただ日本軍を利用して願いを未だに獲得できていない時期を惜しいと思うとLSDCDは評している[49)]。カオダイ教の仏印処理後のヴェトナム帝国に対する評価が，傀儡政権との認識を持ちいまだに真の独立国として確立されていないという認識であったことが分かる。それゆえ，日本の降伏はヴェトナムにとっての二つ目の軛が外されただけで，クゥオンデェを元首として迎えた「ヴェトナム臨時政府」の確立のために日本を利用しきれぬうちに日本軍が降伏したことは惜しかったとの認識である。日本の外務省･大使府を中心とした「大東亜解放」論に依拠したと思われるクゥオンデェや松下光広を初めとする日本のヴェトナム独立支持グループの指令を受けながら，現地軍の指揮下に組み込まれ，軍中央の「人種戦回避」論と独立を担う勢力が未成熟との認識から真の独立も付与されず，日本軍の手先となっての警備行動を担当

するにすぎなかった。真の独立も遠く，日本の敗北が日に日に明らかになる中で，これまでの親日勢力の対日協力はますます消極的であった[50]。

(7) 国家統一戦線（MẶT TRẬN QUỐC GIA THỐNG NHỨT）を擁護するデモ

フランスと日本の二つの軛を脱したヴェトナムの南部民衆の歓喜は，政治的立場にかかわらず表現された。カオダイを中心とする勢力は8月23日に20万人デモとして結実し，24日には共産党指導者チャン・ヴァン・ザウ（Trần Văn Giàu）が大衆集会に出席し人民蜂起が全土で進行しつつあることを宣言し，武装した前衛青年（Thanh niên Tiền Phong）隊が日本軍が警備していた施設を慎重に避け，計画していた拠点を数時間で占拠した。翌25日には50万にも上る農民や都市民衆がサイゴンの街を歓喜とお祭り気分で埋め尽くした[51]。

23日のカオダイ中心のデモは，独立を享受したばかりのヴェトナム帝国政府が南部欽差大臣(Khâm Sai Đại Thần Nam Bộ)に選んだグゥエン・ヴァン・サム（Nguyễn Văn Sâm）氏が着任する前に，欽差のための内閣官房長官（Đổng Lý văn phòng cho Khâm Sai）に選ばれたホォ・ヴァン・ガァ（Hô Văn Ngà）氏が全権代理を務め，完全独立をしたばかりの新しい国の「国家統一戦線」擁護のためのデモが新聞世論と民衆によって組織されたものである。すなわち，その当時のヴェトナム内閣（Tòa Nội Các Việt Nam）を擁護することがこのデモの目的であった。それゆえ，このデモに見られた標語は「国家統一戦線」(Mặt Trận Quốc Gia Thống Nhứt)・「ヴェトナム完全独立」(Việt Nam Độc Lập Hoàn Toàn)・「打倒フランス帝国」(Đả Đảo Đế Quốc Pháp)・「役人世界の殺菌消毒」(Tẩy Uế Quan Trường)，等々であった[52]。

それに比し，24日・25日のデモは，「八月革命」の一環として行われたもので,前衛青年の指導者ファム・ゴック・タック(Pham Ngoc Thach)とチャン・ヴァン・ザウは8月24日に寺内大将に会い，日本軍が革命に干渉しないよう説得し，日本軍を攻撃の対象とせず，中立化させることに成功し

ていた。

カオダイのデモや軍事パレードは，口では自決自強と言いながら日本軍の後ろ盾のないところでは，新生ヴェトナムの中で一定の都市住民層を結集しえたものの，共産党勢力に抗しえる社会勢力を結集しえなかった。それゆえ，カオダイが護法ファム・コン・タックと５人の天封の大職色の帰国を条件に，日本に代わってフランスを利用すると言う意味での「親仏勢力」へと転換していくことに繋がったものとも解される。

おわりに

本稿は，『復国時期 1941 － 1946 におけるカオダイ教の歴史』の「Ⅰ．護法（Đức Hộ Pháp）が難に遭われた後の教えの状況，Ⅱ．日本と協力して事業を行う時期」に記されたタイニン派カオダイ教の側からの史料に依拠しつつ，また同書の補足（PHẦN II　BỔ TÚC HỒI KÝ PHỐI SƯ THƯỢNG VINH THANH TRẦN QUANG VINH 1897-1975）を参照しながら，カオダイ教タイニン派という一新興宗教の立場からみた，日本への軍事的な協力に至らざるを得なかった過程と，そこでカオダイ教徒を動員するにあたり扶鸞を利用しながら協力関係を構築したことを，クゥオンデェの復国同盟会との関わりを背景として示唆し述べたものである。カオダイ軍の部隊編成などの詳細は本文にゆだねるが，この時期に関する史料的な価値は低くない。その要旨は，以下にまとめて指摘しうると思う。

1. カオダイの日本への接近は，南圻蜂起以降のフランス植民地主義の弾圧の帰結である。

2. チャン・クゥアン・ヴィンは扶鸞を利用して，教えの統一とその指導権を確立した。

3. 1941 年 7 月のドクゥー総督が宗教活動を束縛し始め，フランス植民地

支配の桎梏から逃れるためにカオダイ教タイニン聖座派は，日本の憲兵隊の庇護を求めて日本との「協力機関」の創設に踏み切ったが，クゥオンデェの越南復国同盟会のヴェトナム南部における一支部として，チャン・クゥアン・ヴィンは救道救国路線を取り，独立を望む政治活動にのめり込んで行った。

4. クゥオンデェとカオダイ教タイニン派の関係は，チャン・クゥアン・ヴィンを通して1939年頃から始まり，1942年8月25日に日本憲兵隊本部を通してクゥオンデェの私信を得，同年10月28日の機筆により，チャン・クゥアン・ヴィンは，越南復国同盟会の支部をカオダイ内部に「協力機関」（Cơ quan hiệp tác）として創設し，1943年には反日派を粛清して日本憲兵隊に渡して，チャン・クゥアン・ヴィンの代表教師としての指導体制を確立した。

5. カオダイ教徒の日本軍部への協力は，情報収集活動，監視活動，等から軍事基地の支援，陸・海・空軍への志願，労働力の提供，さらには，高台奉仕隊といった警備活動と支援にまで及んだ。

6. カオダイ軍は，1943年末から44年初めに，造船所に動員されたカオダイ教徒の青年に現地の日本海軍の参謀部が軍事教練を課してカオダイ義勇軍とし，同年6月から9月の間に武力処理に対応する軍事組織形成の指令をクゥオンデェから得て，「内応義兵」･「近衛軍」としたことから始まる。仏印処理後，カオダイ教の私兵としての性格から現地治安維持の責任を負う準警察組織へと変化した。

7. カオダイ軍は，越南復国同盟会の一軍事組織としての側面を持った。ただ，軍と言いながらも，当時の武器の中心は竹槍にすぎなかった。

8. カオダイへの接触は，現地では憲兵隊から参謀部へと変わった。

9. 日本の現地軍が訓練をした結果カオダイは軍を創設しえたが，実態はカオダイが諜報から監視活動，軍事支援から活動基盤の維持・確保，さらには労働力の動員から警邏活動の肩代わりまでを担って日本軍を支援したので日本軍は明号作戦を成功できた。

ただ，これまでの研究の中で「親日」と名づけられてきた勢力の見直しや，日本のアジア主義者の諸活動に注目するあまり，ヴェトナムの人たちがそれをどのように評価していたのかを見直す必要があろう。チャン・クゥアン・ヴィンと日本軍や日本人との間の交換文書や，クゥオンデェとの間の往復書簡，さらには当時の多くの愛国分子や諸政党との関係を明らかにする文書などがないのが本稿の史料的な限界と思うが，カオダイ教タイニン聖座派と日本との関係をカオダイの人たちの視点を通して明らかにする試みとした。

また，表2から知れるように，カオダイ教のタイニン派以外では，日本の侵略に抗して民族解放勢力に投じた真理聖会(Cao Đài Chơn Lý)，ミン・チョン・ダオ（Minh Chơn Đạo）派[53]，バン・チン・ダオ（Ban Chỉnh Đạo）派[54]，ティエン・ティエン（Tiên Thiên）派[55]，カオダイ白衣連団真理（Cao Đài Bạch Y Liên Đoàn Chơn Lý）聖会等は抗戦期の表彰を得ていることから文字通りの自決自強路線を歩んだことが知れる。それゆえ，本稿で論じたのはカオダイ教全体としての日本との関係ではなく，タイニン聖座派と日本軍との関わりを描いたものに過ぎない。ちなみに，日本総領事蓑田義男は，ジョン・ブゥオム戦線（mặt trận Gi ồng Bốm）を指導し抗仏勢力を構築[56]したミン・チョン・ダオのカオ・チュウ・ファット（Cao Triều Phát）に接触を図った[57]が，断られている。

末筆になったが，『チャン・クゥアン・ヴィン回想録』の現物を最初にお教えいただいたのは南山大学の宮沢千尋先生で，先生のご教示がなければこの時期のカオダイ教タイニン聖座派の歴史も明らかでなかったものと思う。また，学習院大学の武内先生の懇篤な指導をいただいた。記して両先生に深謝申し上げます。

表２　カオダイ教諸派の21世紀初頭の信徒数等と抗戦期の表彰者数

	カオダイ教諸派	職色数 Chức Sắc	職事数 Chức Việc	信徒数 Tín Đồ	祭祀基礎数 Cơ sở thờ tự	ヴェトナムの英雄的母 Bà mẹ Việt Nam anh hùng	英雄的職色 Chức Sắc	英雄的信徒 Tín Đồ	英雄的家庭 Gia Đình
1	タイ・ニン聖会 Hội Thánh Tây Ninh 1927-	2656		1318496	374				
2	真理聖会 Hội Thánh Chơn Lý 1931-	1563	188	7356	28	1	144	41	26
3	ミン・チョン・ダオ派 Phái Minh Chơn Đạo 1935-	728		31077	49	59	277	414	131
4	ティエン・ティエン(先天)派 Phái Tiên Thiên 1932-	1912		52859	122	48	374	338	217
5	ベン・チェ聖会（バン・チン・ダオ） Hội Thánh Bến Tre (Ban Chỉnh Đạo) 1931-	2921		788592	249	76	233	1168	486
6	カオダイ白衣連団真理聖会 Hội Thánh Cao Đài Bạch Y Liên Đoàn Chơn Lý 1936-	102	185	4725	15	5	46		
7	カオダイ・チュウ・ミン・ロン・チャウ聖会 Hội Thánh Cao Đài Chiếu Minh Long Châu 1928-	59	113	5174	12		31	40	
8	カウ・コォ・タム・クゥアン聖会 Hội Thánh Cầu Kho Tam Quan 1927-	237	206	31077	23				
9	伝教聖会 Hội Thánh Truyền Giáo	331	2191	44098	62				

出典：Phạm Bích Hợp ; Người Nam Bộ và Tôn Giáo Bản Địa, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội. 2007, pp.277-300

注記 ；「21世紀初頭の信徒数等」とは、Phạm Bích Hợpが調査した2005年前後の職色数・職事数・信徒数・祭祀基礎数を指すと思われる。また、「抗戦期の表彰者数とは、祖国戦線の正式な顕彰対象である「ヴェトナムの英雄的な母」・「ヴェトナムの英雄的な家庭」の他に、抗仏・抗日・抗米戦争に参加した各宗派の職色・信徒を「英雄的職色」・「英雄的信徒」と表した。

［注］

1) Trần Mỹ Vân, *A Vietnamese Royal Exile in Japan : Prince Cường Để (1882-1951)*, London and New York : Routledge 2005, p.169

2) 神谷美保子『ベトナム 1945：明号作戦とインドシナ三国独立の経緯』文芸社, 2005, 三十一頁に「一九四四年一月末の，南方軍からインドシナ駐屯軍に対する「マ号作戦準備」命令（具体的な実施内容は明らかでないという)，林中佐に対する極秘裏の安南人の民族独立運動の研究命令をもって，着手されたと考えていいだろう。」とあり，この「安南人の民族独立運動の研究」の具体的な内容が，カオダイ教の救道救国革命を指すと考えると，カオダイ義勇軍の創設訓練を含めて，時期的には符合する。

なお，立川京一は，佛印派遣軍參謀長長勇発陸軍次官阿南惟幾宛印軍情第 18 号（昭和 16 年 1 月 8 日付）（陸軍省「昭和十六年陸支密大日記」第 4 号〔防衛研究所蔵〕)，佛印派遣軍參謀長長勇発陸軍次官阿南惟幾宛印軍情第 120 号（昭和 15 年 12 月 28 日付）（陸軍省「昭和十六年陸支密大日記」第 6 号〔防衛研究所蔵〕）を引用して，「ベトナム南部では，タイニンに本部を置くカオダイ教が武装蜂起を試みた。」と記しているが，当該資料が示す「高台教を中心とする暴動」は「タン・アン」，「ミート」，「カントー」等の部落が暴動の中心地であり，この高台教がタイニンに本部を置くタイニン派とは記していない。一九四十年八月二十六日にタイニン聖座が閉鎖されたことは確かだが，同資料に記された地を中心として，抗仏武装闘争を展開していたのは，南圻蜂起に参加した愛国諸派のカオダイ教諸派とジィオン・ブゥオム戦線であり，タイニン派ではない。それゆえ，同資料の記す暴動は，越南復国同盟会とは何の関わりを持たないものと思う。髙津　茂「カオダイ教の日本への夢想 1934 － 1941」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第 41 号，2006, 22-25 頁，髙津　茂「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイ・ニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」，日本共生科学会『共生科学』第 2 巻, 2011, 111 頁

3) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, Maryland : Thánh Thất Vùng Hoa Thịnh Đốn, 1997, pp.217-218

4) 髙津　茂「近世ヴェトナムの「万教合一論」カオダイ教聖典『聖言（Thanh Ngon)』についての基礎的考察（1)」，日本共生科学会『共生科学』第 1 巻, 2010, 103-111 頁

5) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.156-157

6) Chizuru Namba, *Français et Japonais en Indochine (1940-1945) : Colonisation, propagande et rivalité culturelle*, Paris : Éditions Karthala, 2012, p.107
7) 立川京一「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」,『防衛研究所紀要』第 3 巻第 2 号, 2000, 81 頁
8) Trần Mỹ Vân, *A Vietnamese Royal Exile in Japan : Prince Cường Để (1882-1951)*, op.cit., p.169
9) 立川京一 前掲論文, 85 頁
10) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., p.219
11) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.219 -220
12) 立川京一前掲論文, 81 頁
13) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., p.221
14) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.222 -223
15) 立川京一前掲論文, 84 頁
16) Nguyen Luc Tien「ベトナム・日本関係史の研究 – 明治維新から太平洋戦争まで –」, 広島大学大学院文学研究科 (博士論文), 1998, 171 頁
17) 立川京一「戦時下仏印におけるフランスの対日協力 –1940 〜 45 年 –」『戦史研究年報』第 2 号, 防衛省防衛研究所, 1999, 41 〜 56 頁
18) Nguyen Luc Tien , 前掲論文, 168 〜 169 頁
19) Nguyen Luc Tien 前掲論文, 173 〜 174 頁
20) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.223-224
21) Trần Mỹ Vân, *A Vietnamese Royal Exile in Japan : Prince Cường Để (1882-1951)*, op.cit., pp.172-174. Tran My Van, *Japan and Vietnam's Caodaists : A Wartime Relationship (1939-45)*, Journal of Southeast Asian Studies 27, 1 (March 1996), pp.187-188
22) 外務省編『日本外交年表竝主要文書』下巻, (明治百年史叢書 二巻) 原書房, 1966, 606-607 頁
23) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.224 -225
24) ルフェーブル通りは, 現在のグゥエン・コン・チュ (Nguyen Cong Tru) 通りに当たる。Thạch Phương - Lê Trung Hoa (Chủ Biên) : *TỪ ĐIỂN SÀI GÒN -*

THÀNH PHỐ HỒ CHÍ MINH, Tái Bản có bổ sung, 2008, Nhà Xuất Bản Trẻ, p.600

25) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.225-226

26) Nguyen Luc Tien 前掲論文, 173 ~ 174 頁

27) 牧久『「安南王国」の夢ベトナム独立を支援した日本人』, ウェッジ, 2012, 331-341 頁

28) トゥオン氏の庭園とはタオ・ダン公園 (Cong vien Tao Dan) のことで, 一九七五年以降は文化公園 (Cong vien Van Hoa) と称されている。Thạch Phương - Lê Trung Hoa (Chủ Biên) : *TỪ ĐIỂN SÀI GÒN - THÀNH PHỐ HỒ CHÍ MINH*, op.cit., pp.798-799

29) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.227-228

30) 青い道服は儒教を, 赤い道服は道教を, 黄色い道服は仏教に帰属することを意味している。

31) カオダイ軍の服装や訓練の様子は, Gobron, M., *Le Caodaisme en Image*, Paris : Dervy, 1949 に多くのモノクロ写真がある。

32) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.226-229

33) Nguyen Luc Tien 前掲論文, 176 頁

34) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., p.229

35) 牧久, 前掲書, 350 頁

36) 牧久, 前掲書, 334-341 頁

37) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.229-230

38) 白石昌也『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子　ファン・ボイ・チャウとクォンデ』株式会社　彩流社, 2012, 234 頁

39) 牧久, 前掲書 351 頁

40) ノロドム通りは現在のレェ・ズアン (Le Duan) 通りに当たる。Thạch Phương - Lê Trung Hoa (Chủ Biên) : *TỪ ĐIỂN SÀI GÒN - THÀNH PHỐ HỒ CHÍ MINH*, op.cit., p.601

41) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, *Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*, op.cit., pp.230-231

42) 北野典夫「天草海外発展史」, 天草市立中央図書館所蔵の『週刊みくに』昭和 56 年 9 月 25 日号

43）立川京一「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」,『防衛研究所紀要』第 3 巻第 2 号，2000, 86 頁

44）牧久，前掲書 356 頁

45）白石昌也，前掲書，235 頁

46）摂政ではなく枢密院議長にしようとしたとの指摘もある。白石昌也, 前掲書, 235 頁，牧久，前掲書，357 頁

47）Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh，*Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*，op.cit., pp.231 -234

48）白石昌也，前掲書，235 頁

49）Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh，*Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*，op.cit., pp.234 -236

50）Nguyen, Luc Tien，前掲論文，176 頁

51）Nguyen, Luc Tien，前掲論文，197 頁

52）Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh，*Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài*，op.cit., pp.236 -237

53）髙津　茂「チャン・ダオ・クゥアンとカオ・ダイ・ミン・チョン・ダオの形成過程」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第 45 号 , 2010, 100-116 頁

54）髙津　茂「グゥエン・ゴック・トゥアンとカオダイ・バン・チン・ダオの成立をめぐって」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第 46 号 , 2011, 136-151 頁

55）髙津　茂「カオダイ・ティエン・ティエン（先天）派の創設過程」，東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第 47 号 , 2012, 176-197 頁

56）髙津　茂「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイ・ニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」，日本共生科学会『共生科学』第 2 巻，2011, 109-122 頁

57）Phan Văn Hoàng : *Cao Triều Phát. Nghĩa Khí Nam Bộ*，2001，Nhà Xuất Bản Trẻ, 75-77 頁